

# 自轉車日記

夏目漱石

青空文庫



西曆一千九百二年秋忘月忘日白旗を寢室の窓に翻えひるがして下宿の婆さんに降を乞うや否や、婆さんは二十貫目の体軀たいくを三階てっぺの天辺んまで運び上げにかかる、運び上げるといふべきを上げにかかると申すは手間のかかるを形容せんためなり、階段を上ること無慮りよ四十二級、途中にて休憩する事前後二回、時を費す事三分五セコンドの後この偉大なる婆さんの得意なるべき顔面が苦し気に戸口にヌツと出現する、あたり近所は狭苦しきばかり也、この会見の栄を肩身狭くも双肩になに荷える余に向つて婆さんは媾こうわ和条件の第一款として命令的に左のごとく申し渡した、

自転車に御乗んなさい

ああ悲いかなこの自転車事件たるや、余はついに婆さんの命に従つて自転車に乗るべく否自転車より落るべく「ラヴェンダー・ヒル」へと参らざるべからざる不運に際会せり、監督兼教師は○  
○氏なり、しやうぜん悄然たる余を従えて自転車屋へと飛び込みたる彼はまず女乗の手頃なる奴を撰んでこれがよかろうと云う、その理由いかにと尋ぬるに初学入門の捷徑しやうけいはこれに限るよと降参人と見てとつていやに軽蔑けいべつした文句を並べる、不肖ふしやうなりといえども軽少な鼻下に髯ひげを蓄えたる男子に女の自転車で稽古けいこをしるとは情ない、まあ落ちても善いから当り前の奴でやつてみよう  
と抗議を申し込む、もし採用されなかつたら丈夫玉碎瓦全を恥ず  
とか何とか珍ちん粉ぷん漢かんの氣きえんを吐こうと暗したごに下しらえ拵しに黙もくっている、

とそれならこれにしよう、いとも見苦しかりける男乗をぞあて  
 がいける、思えらく能者筆を扱えらばず、どうせ落ちるのだから車の  
 美醜などは構うものかと、あてがわれたる車を重そうに引張り出  
 す、不平なるは力を出して上からウンと押し見て見るとギーと鳴る  
 事なり、伏おもんして惟みれば関節が弛ゆるんで油気がなくなつた老朽の自転  
 車に万里の波濤はとうを超こえて遙はるばる々と逢いに來たようなものである、  
 自転車屋には恩給年限がないのか知らんとちよつと不審を起して  
 みる、思うにその年限は疾とツくの昔に來ていて今まで物置の隅すみに  
 閑居静養を専もつぱらにした奴に違ちがひない、計らざりき東洋の孤客に引き  
 ずり出され奔命たえに堪たえずして悲鳴を上るに至つては自転車の末路ま  
 た憐あわれむべきものありだがせめては降参の腹はらいせ癒いにこの老骨をギユ

―と云わしてやらんものと乗らぬ先から当人はしきりに乗り気になる、然るにハンドルなるもの神経過敏にてこちらへ引けば股にぶつかり、向へ押しやると往来の真中へ馳かけ出そうとする、乗らぬ内からかくのごとく処置に窮するところをもつて見れば乗った後の事は思いやるだに涙の種と知られける、

「どこへ行つて乗ろう」「どこだつて今日初めて乗るのだからなるたけ人の通らない道の悪くない落ちても人の笑わないようなところに願いたい」と降参人ながらいろいろな条件を提出する、仁恵なる監督官は余が衷ちゆうじよう情あわれを憐あわれんで「クラパム・コンモン」の傍人跡あまり繁しげからざる大道の横手馬乗場へと余を拉らっし去る、しかして後「さあここで乗つて見たまえ」という、いよいよ降参人

の降参人たる本領を發揮せざるを得ざるに至つた、ああ悲夫、

乗つて見たまえとはすでに知己ちぎの語にあらず、その昔本国にあつて時めきし時代より天涯てんがい万里孤城落日資金窮乏の今日に至るまで人の乗るのを見た事はあるが自分が乗つて見たおぼえは毛頭ない、去るを乗つて見たまえとはあまり無慈悲なる一言と怒髪鳥打帽つひを衝て猛然とハンドルを握つたまではあつぱれ武者むしやぶりたのもしかつたがいよいよ鞍くらに跨またがつて顧盼こけい勇を示す一段になるとおあつらえ通りじとおに参らない、いざという間際まぎわですどんと落ること妙なり、自転車は逆立も何もせず至極しごく落ちつきはらつたものだが乗客だけはまさに鞍くら壺つぼにたまらずでん堂とこける、かつて講釈師きいに聞きいた通りを目のあたり自ら実行するとは、あにはからんや、

監督官云う、「初めから腰を据えようなどというのが間違っている、ペダルに足をかけようとしても駄目だよ、ただしがみついて車が一回転でもすれば上出来なんだ」、と心細いこと限りなし、ああ吾事休わがこときゆうす矣いくらしがみついても車は半輪転もしないああ吾事休矣としきりに感投詞を繰り返して暗に助勢を嘆願する、かくあらんとは兼て期したる監督官なれば、近く進んでさあ、僕がしつかり抑えているから乗れたまえ、おっとそう真ともに乗っては顛り返る、そら見たまえ、膝を打たろう、今度はそーっと尻をにかけて両手でここを握って、よしか、僕が前へ押し出すからその勢で調子に乗って馳け出すんだよ、と怖がる者を面白半分前へ突き出す、然るにすべてこれらの準備すべてこれらの労力が突き出

される瞬間において砂地に横面を抛りつけられるための準備にしてかつ  
 つ勞力ならんとは実に神ならぬ身の誰か知るべき底の驚愕である。

ちらほら人が立ちどまつて見る、にやにや笑つて行くものがある、  
 向うの櫛の木の下に乳母さんが小供をつれて口ハ台に腰をか  
 けてさつきからしきりに感服して見ている、何を感服しているの  
 か分らない、おおかた流汗淋漓 大童となつて自転車と奮  
 闘しつつある健気な様子に見とれているのだろう、天涯この好  
 知己を得る以上は向脛の二三カ所を擦りむいたつて惜しくは  
 ないという氣になる、「もう一遍頼むよ、もつと強く押してくれ  
 たまえ、なにまた落ちる？ 落ちたつて僕の身体だよ」と降参人

たる資格を忘れてしきりに汗氣<sup>かんきえん</sup>を吹いている、すると出し抜  
に後ろから Sir! と呼んだものがある、はてな滅多<sup>めった</sup>な異人に近づ  
きはなはずだがとふり返ると、ちよつと人を狼狽<sup>ろうばい</sup>せしむるに  
足る的大巡査がヌーツと立っている、こちらはこんな人に近づ  
きではないが先方ではこのポット出のチンチクリンの田舎者<sup>いなかもの</sup>に  
近づかざるべからざる理由があつてまさに近づいたものと見える、  
その理由に曰く<sup>いわ</sup>ここは馬を乗る所で自転車に乗る所ではないから  
自転車を稽古<sup>けいこ</sup>するなら往来へ出てやらしやい、オーライ謹んで命  
を領すと混淆<sup>こんこうしき</sup>式の答に博学の程度を見せてすぐさまこれを監督  
官に申出る、と監督官は降参人の今日の凹<sup>へこ</sup>み加減充分とや思ひけ  
ん、もう帰ろうじやないかと云う、すなわち乗れざる自転車と手

を携えて帰る、どうでしたと婆さんの問に敗余の意氣をもらすらく車嘶いなないて白日暮れ耳鳴つて秋氣きた来るヘン

忘月忘日 例の自転車を抱いて坂の上に控おもむえたる余は徐ろに眼を放つて遥はるかあなたの下を見廻す、監督官の相図を待つて一氣にこの坂を馳かけ下りんとの野心あればなり、坂の長さ二丁余、傾斜の角度二十度ばかり、路幅十間を超こえて人通多からず、左右はゆかしく住みなせる屋敷ばかりなり、東洋の名士が自転車から落る稽古けいこをすると聞いて英政府が特に土木局に命じてこの道路を作らしめたかどうだかその辺はいまだに判然しないが、とにかく自転車用道路として申分のない場所である、余が監督官は巡查の小言に胆きもを冷したものが乃至ないしはまた余の車を前へ突き出す労力はぶを省く

ためか、昨日から人と車を天然自然ところがすべく特にこの地を相し得て余を連れだしたのである、

人の通らない馬車のかよわない時機を見計つたる監督官はさあ今だ早く乗りたまえという、ただしこの乗るといふ字に註釈が入る、この字は吾らわれ兩人の間にはいまだ普通の意味に用られていない、わがいわゆる乗るは彼らのいわゆる乗るにあらざるなり、鞍くらに尻をおろさざるなり、ペダルに足をかけざるなり、ただ力学の原理に依頼して毫も人工を弄せざるの意なり、人をもよけず馬をも避けず水火をも辞せず驀地ばくちに前進するの義なり、去るほどにその格かっこう好たるやあたかも疝氣持せんきもちが初出でぞめに梯子乗はしごのりを演ずるがごとく、吾ながら乗るといふ字を濫用らんようしてはおらぬかと危ぶむく

らいなものである、されども乗るはついに乗るなり、乗らざるに  
あらざるなり、ともかくも人間が自転車に附着している也、しか  
も一気呵成いっきかせいに附着しているなり、この意味において乗るべく命ぜ  
られたる余は、疾風のごとくに坂の上から転がり出す、すると不  
思議やな左の方の屋敷の内から拍手して吾が自転行を壮にしたい  
たずらものがある、妙だなと思う間もなく車はすでに坂の中腹へ  
かかる、今度は大変な物に出逢であった、女学生が五十人ばかり行列  
を整えて向むからやってくる、こうなつてはいくら女の手前だから  
と言つて気取る訳にもどうする訳にも行かん、両手は塞ふさがつている、  
腰は曲つている、右の足は空を蹴けつている、下りようとしても車の  
方で聞かない、絶体絶命しようがないから自家独得の曲乗のまま

で女軍の傍をからくも通り抜ける。ほっと一息つく間もなく車はすでに坂を下りて平地にあり、けれども毫ごうも留まる気色けしきがない、しかのみならず向うの四ツ角に立っている巡査の方へ向けてどんどん馳かけて行く、気が気でない、今日も巡査に叱られる事かと思いつながらもやはり曲乗の姿勢をくずす訳に行かない、自転車は我に無理情死せまを逼る勢でむやみに人道の方へ猛進する、とうとう車道から人道へ乗り上げそれでも止まらないで板いた塀べいへぶつかって逆戻をする事一間半、危くも巡査を去る三尺の距離でとまった。大分御骨が折れましようかと笑ながら査公が申された故、答いえて曰わくイエス、

忘月忘日「……御調べになる時はブリチツシュ・ミュージアム

へ御出かけになりますか」「あすこへはあまり参りません、本へやたらにノートを書きつけたり棒を引いたりする癖があるものですから」「さよう、自分の本の方が自由に使えて善ですね、しかし私などは著作をしようと思うとあすこへ出かけます……」

「夏目さんは大変御勉強だそうですね」と細君が傍から口を開く  
「あまり勉強もしません、近頃は人から勧められて自転車を始めたものですから、朝から晩までそればかりやっています」「自転車は面白うござんすね、宅ではみんな乗りますよ、あなたもやはり遠乗をなさいますよう」遠乗をもつて細君から擬せられた先生は実に普通の意味において乗るちよう事のいかなるものなるかをさえ解し得ざる男なり、ただ一種の曲解せられたる意味をもつて

坂の上から坂の下まで辛うじて乗り終<sup>おお</sup>せる男なり、遠乗の二字を承<sup>お</sup>つて心安からず思いしが、掛<sup>かけ</sup>直<sup>ね</sup>を云うことが第二の天性とまで進化せる二十世紀の今日、この点にかけては一人前に通用する人物なれば、如才なく下のごとく返答をした「さよう遠乗というほどの事もまだしませんが、坂の上から下の方へ勢よく乗りおろす時なんかすこぶる愉快ですね」

今まで沈黙を守っておつた令嬢はこいつ少しは乗<sup>で</sup>きるなど<sup>かんち</sup> 疝<sup>が</sup>を<sup>い</sup>したものと見えて「いつか夏目さんといっしょに皆でウインブルドンへでも行つたらどうでしょう」と父君と母上に向つて動議を提出する、父君と母上は一斉に余が顔を見る、余ここにおいてか少々尻こそばゆき状態に陥るのやむをえざるに至れり、さ

りながら妙齡なる美人より申し込まれたるこの果し状を真<sup>ま</sup>平<sup>びら</sup>御<sup>ご</sup>免<sup>めん</sup>蒙<sup>こう</sup>と握りつぶす訳には行かない、いやしくも文明の教育を受けたる紳士が婦人に対する尊敬を失しては生<sup>しょう</sup>涯<sup>がい</sup>の不面目だし、かつやこれでもかこれでもかと余が咽喉<sup>のど</sup>を扼<sup>やく</sup>しつつある二寸五分のハイカラの手前もある事だから、ことさらに平氣と愉快を等分に加味した顔をして「それは面白いでしょうかし……」

「御勉強で御忙しいでしょうが今度の土曜ぐらいは御閑<sup>おひま</sup>でいらつしやいましょう」とだんだん切り込んでくる、余が「しかし……」の後には必ずしも多忙が来ると限っておらない、自分ながら何のための「しかし」だかまだ判然せざるうちにこう先<sup>せん</sup>を越されてはいよいよ「しかし」の納り場がなくなる、「しかしあまり人通り

の多い所ではエー……アノーまだ練なれませんか」とようやく一方の活路を開くや否や「いえ、あの辺の道路は実に閑静なものですよ」とすぐ通せん坊をされる、進しんたい退たいこれきわまるとは啻ただに自転車の上的みにてはあらざりけり、と独ひとりで感心をしている、感心したばかりでは埒うちがあかないから、この際唯ゆい一いつの手段として「しかし」をもう一遍繰くり返かえす「しかし……今度の土曜は天気でしようか」旗幟きしの鮮明ならざること夥おびただしい誰に聞いたつて、そんな事が分るものか、さてもこの勝負男の方負とや見たりけん、審判官たる主人は仲裁ちゆうさいこ乎として口を開いて曰いわく、日はきめんでもいずれそのうち私が自転車で御宅へ伺いましょう、そしていっしょに散歩でもしましょう、——サイクリストに向つていっしょに

散歩でもしようとはこれいかに、彼は余を目してサイクリストたるの資格なきものと認定せるなり

このうつくしき令嬢と「ウインブルドン」に行かなかつたのは余の幸であるかはた不幸であるか、考うることに四十八時間ついに判然しなかつた、日本派の俳諧師はいかいしこれを称して朦朧体もうろうたいという忘月忘日 数日来の手痛き経験と精緻せいちなる思索とによつて余は下の結論に到着した

自転車の鞍くらとペダルとは何も世間体を繕つくろうために漫然と附着してゐるものではない、鞍は尻をかけるための鞍にしてペダルは足を載せかつ踏みつけると回転するためのペダルなり、ハンドルはもつとも危険の道具にして、一度ひとたびこれを握ると

きは人目を眩せしむるに足る目勇しき働きをなすものなり

かく漆桶しつとうを抜くがごとく自転悟を開きたる余は今例の監督官

及びその友なる貴公子某伯爵と共にくつわつらを連ねて「クラパムコンモ

ン」を横ぎり鉄道馬車の通う大通りへ曲らんとするところだと思  
いたまえ、余の車は両君の間に介在して操縦すでに自由ならず、

ただ前へ出られるばかりと思いたまえ、しかるに出られべき一方

口が突然塞ふさがつたと思いたまえ、すなわち横ぎりにかかる塗炭とたんに右

の方より不都合なる一輛いちりようの荷車が御免ごめんよとも何とも云わず傲

然うぜんとして我前を通つたのさ、今までの態度を維持すれば衝突す

るばかりだろう、余の主義として衝突はこちらが勝つ場合につい  
てのみあえてするが、その他負色の見えすいたような衝突になる

といつでも御免蒙るのが吾家伝来の憲法である、さるによつてこの彪ぼうだい大なる荷車と老朽悲鳴をあげるほどの吾が自転車との衝突は、おやじの遺言としても避けねばならぬ、と云つて左右へよけようとする御両君のうちいずれへか衝突の尻をもつて行かねばならん、もつたいなくも一人は伯爵の若殿様で、一人は吾が恩師である、さような無礼な事は平民たる我々風情ふせいのすまじき事である、のみならず捕虜の分際として推参な所作と思わるべし、孝ならんと欲すれば礼ならず、礼ならんと欲すれば孝ならず、やむなくんば退却か落車の二あるのみと、ちよつとの間に相場がきまつてしまった、この時事に臨んでかつて狼ろう狽ばいしたる事なきわれつらつら思うよう、できさえすれば退却も満まん更ざらでない、少なくとも

も落車に優まさること万々なりといえども、悲夫逆艦さかろの用意ととのいまだ調わざる今日の時勢なれば、エー仕方がない思い切つて落車にしろ、と両車の間に堂と落つ、折しも余を去る事二間ばかりのところ、退屈そうに立っていた巡査——自転車の巡査におけるそれなお刺身のツマにおけるがごときか、何ぞそれ引き合に出るのはなはだしき——このツマ的巡査が声を揚げてアハ、アハ、アハ、と三度笑つた。その笑い方苦笑にあらず、冷笑にあらず、微笑にあらず、カンラカラカラ笑にあらず、全くの作り笑なり、人から頼まれてする依托笑なり、この依托笑をするためにこの巡査はシツクスペンスを得たか、ワン・シリングを得たか、遺憾いかんながらこれを考究する暇がなかつた、

へんツマ巡査などが笑つたつてとすぐさま御両君の後を慕つて馳かけ出す、これが巡公でなくつて先日の御娘さんだつたらやはりすぐさま馳け出されるかどうだかの問題はいざとならなければ解あ積あがつかないから質問しない方がいいとして先へ進む、さて両君はこの辺の地理不案内なりとの口実をもつて覚おほつか束あなき余あに先導たるべしとの嚴命を伝えた、しかるに案内には詳くわしいが自転車には毫べいごうも詳しくないから、行こうと思う方へは行かないで曲り角へくるとただ曲りやすい方へ曲つてしまふ、ここにおいてか同じ所へ何なんべん返も出て来る、始めの内は何とかかんとかごまかしていたが、そうは持ち切れるものでない、今度は違つた方へ行こうとの御意である、よろしいと口には云つたようなものの、ままになら

ぬは浮世の習、容易にそつちの方角へ曲らない、道幅三分の二も来た頃、やつとの思でハンドルをギューツと振ねじつたら、自転車は九十度の角度を一どきに廻まつてしまった、その急廻転のために思いがけなき功名を博し得たと云う御話しは、明日の前講になかという価値もないから、すぐ話してしまふ、この時まで気がつかなくかつたがこの急劇なる方向転換の刹那せつなに余と同じ方角へ向けて余に尾行して来た一人のサイクリストがあつた、ところがこの不意ふいに驚うちいて車をかわす暇もなくもろくも余の傍で転がり落ちた、後で聞けば、四ツ角を曲る時にはベルを鳴すか片手をあげるか一通りの挨拶あいさつをするのが礼だそうだが、落天の奇想を好む余はさような月並主義を採とらない、いわんやベルを鳴したり手を挙あげた

り、そんな面倒な事をする余裕はこの際少しもなきにおいてをやだ、ここにおいてかこのダンマリ転換を遂行するのも余にとつては万やむをえざるに出たもので、余のあとにくつついて来た男が**びっくり**吃驚して落車したのもまた無理のないところである、双方共無理のないところであるから不思議はない、当然の事であるが、西洋人の論理はこれほどまで発達しておらんと見えて、彼の落ち人**おおいげきりん**大に逆鱗の体で、チンチンチャイナマンと余を罵つた、罵られたる余は**いっしむく**一矢酬ゆるはずであるが、そこは**だいゆう**大悠なる豪傑の本性をあらわして、御気の毒だねの一言を遺して**のこ**ふり向もせず曲つて行く、実はふり向こうとするうちに車が通り過ぎたのである、「御気の毒だね」よりほかの語が出て来なかつたのである、正直

なる余は苟こうしよ且にも豪傑など云う、一種の曲者と間違らるるを恐

れて、ここにゆつくり弁解しておくなり、万一余を豪傑だなどと

買かいかぶ被かぶつて失敬な挙動あるにおいては七生まで崇たるかも知れない、

忘月忘日 人間万事漱石の自転車で、自分が落ちるかと思うと

人を落す事もある、そんなに落胆したものでもない、今日はズ

ーズーしく構えて、バタシー公園へと急ぐ、公園はすこぶる閑静

だが、その手前三丁ばかりのところざつとうが非常の雑沓な通りで、初

学者たる余にとっては難透難徹の難関である、今しも余の自転車

は「ラヴェンダー」坂を無難に通り抜けて、この四通八達の中央

へと乗り出す、向うに鉄道馬車が一台こちらを向いて休んでいる、

その右側に非常に大なる荷車が向うむきに休んでいる、その間約

四尺ばかり、余はこの四尺の間をすり抜けるべく車を走らしたの  
である、余が車の前輪が馬車馬の前足と並んだ時、すなわち余の  
身体からだが鉄道馬車と荷車との間に這入はいりかけた時、一台の自転車が  
疾風のごとく向むこうから割り込んで来た、かようなとつさの際には命  
が大事だから退却にしようか落車にしようかなどの分別は、さす  
がの吾輩にも出なかつたと見えて、おやと思つたら身体はもう落  
ちておつた、落方が少々まづかつたので、落る時左の手でしたた  
か馬の太腹を叩たたいて、からくも四よつばい這の不体裁を免まぬがれた、やれ  
うれしやと思う間もなく鉄道馬車は前進し始める、馬は驚ろいて  
吾輩の自転車を蹴けとば飛す、相手の自転車は何喰わぬ顔ですうと抜け  
て行く、間まの抜ぬけき加減は尋常一様にあらず、この時派出はでやかなる

ギグに乗つて後ろから馳<sup>か</sup>け来<sup>きた</sup>りたる一個の紳士、策<sup>むち</sup>を揚<sup>あ</sup>げざまに  
 余が方<sup>かえり</sup>を顧<sup>い</sup>みて曰<sup>わ</sup>く大丈夫だ安心したまえ、殺しやしないのだか  
 らと、余心中ひそかに驚いて云う、して見ると時には自転車に乗  
 せて殺してしまうのがあるのかしらん英国は險<sup>けん</sup>呑<sup>のん</sup>な所だと

\*

\*

\*

余が甘貫目の婆さんに降参して自転車責<sup>あ</sup>に遇<sup>あ</sup>つてより以来、大  
 落五度小落はその数を知らず、或時は石垣にぶつかつて向<sup>む</sup>脛<sup>こう</sup>ね  
 を擦<sup>す</sup>りむき、或る時は立木に突き当つて生<sup>なま</sup>爪<sup>づめ</sup>を剥<sup>は</sup>がす、その苦

戦云うばかりなし、しかしてついに物にならざるなり、元來この  
 二十貫目の婆さんはむやみに人を馬鹿にする婆さんにして、この  
 婆さんが皮肉に人を馬鹿にする時、その妹の十一貫目の婆さんは、  
 瞬またたきもせず余が黄色な面を打守りていかなる変化が余の眉びもく目の間かん  
 に現るるかを検査する役目を務める、御役目御苦勞の至りだ、こ  
 の二婆さんの呵か責しやくに逢あつてより以來、余が猜さい疑ぎ心しんはますます深  
 くなり、余が継まま子こ根こん性じょうは日に日に増長し、ついには明け放し  
 の門戸を閉鎖して我黄色な顔をいよいよ黄色にするのやむをえざ  
 るに至れり、彼二婆さんは余が黄色の深淺はかを測はかつて彼ら一日のプ  
 ログラムを定める、余は実に彼らにとつて黄色な活動晴雨計であ  
 った、たまたマ降参を申し込んで贏あまし得たるところ若いく干ぼくぞと問

えば、貴重な留学時間を浪費して下宿の飯を二人前食いしに過ぎ  
 ず、さればこの降参は我に益なくして彼に損ありしものと思惟<sup>し</sup>す、  
 無残なるかな、

# 青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年10月29日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 自転車日記

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>